

1 はじめに

1 特異な事件

ドイツ北西部ヴェストファーレン地方の中心都市ミュンスターで、1534年2月から35年6月まで続いた再洗礼派による統治は、ヨーロッパ史上でもほとんど例を見ない特異なものであった。人口約7000~1万人という16世紀の都市としてはかなりの規模を誇ったミュンスターが、当時の神聖ローマ帝国で異端・反乱者だと見なされていた再洗礼派によって約1年半の間支配されたのである。

1532年に説教師ベルンハルト・ロートマンを中心として、ミュンスターで宗教改革運動が始まると、その夏には都市で宗教改革が制度化された。しかし、翌年春にロートマン達説教師による幼児洗礼批判が始まったことを契機に、市内で宗派間の争いが起こった。最終的に再洗礼派がこの争いに勝利し、都市の統治を担うようになった。彼らは、もうすぐこの世界に終末が訪れると期待し、ミュンスターこそキリストが再臨する新しきエルサレムだと見なしていた。再洗礼派によって支配された都市は、都市の君主であるミュンスター司教の軍勢によって包囲され、長きにわたり攻城戦が繰り返された。

もうすぐ世界は終わると思いながら生きていた彼らは、既存の都市制度を廃絶し、預言者を頂に置く神権政に置き換えた。都市の中では私有財産が廃止され、財産が共有された。それまでの婚姻関係が解体され、一夫多妻制が導入されて、全ての女性は結婚を強いられた。オランダから来た預言者ヤン・ファン・ライデンはミュンスターの王となり、王と王妃の宮廷が作られた。

神の奇跡的な力によって、あるいは市外からの援軍によってミュンスターが解放されるという予言は、繰り返し現実に裏切られた。救いは訪れなかったのだ。包囲軍によって外部からの食糧供給が絶たれた都市で

は飢えが広がり、人々は次々に餓死していった。飢えに耐えられない者が市外に逃亡する中、包囲軍が市内に雪崩れ込み、ミュンスターは占領された。男はほとんど皆殺しにされた。ヤン・ファン・ライデンをはじめとする指導者は包囲軍によって捕えられた。指導者三人は処刑された後、鉄の檻に入れられ、見せしめのために聖ランベルティ教会の塔に吊された。この三つの檻は現在も当時と同じように尖塔の上に吊されている¹。

2 異端、反乱者、悪魔

「再洗礼派(独: Wiedertäufer, 英: Anabaptist)」とは、成人が自らの自由意志に基づき受ける信仰洗礼のみを認める人々を指す呼び名である²。キリスト教の教会では既に古代から、キリスト教への入信儀式として幼児洗礼が行われてきた。16世紀に宗教改革が始まって、カトリック教会、宗教改革を支持する福音派諸教会両方が、新生児に対する洗礼を行い続けていた³。

しかし、宗教改革支持者の間で、幼児に対する洗礼は無効だと考える者が出てきた。彼らは、キリスト教の教えを理解し、信仰を持ち、自分の意志でキリスト教徒として生きることを決意することによって、はじめて洗礼は有効になると考えた。すると、教えも理解できず、自覚的信仰も持たない幼児に対する洗礼には効力はないということになる。そのため彼らは、信仰を持つようになった成人に対してのみ洗礼を行うべきだと考えた。

しかし幼児洗礼を認めるカトリックや福音派にとって、成人になってから行われる洗礼は、幼児の時に授けられた洗礼に続く二度目の洗礼であった。そのため彼らは、幼児洗礼を批判し、成人に対する信仰洗礼を支持する人々を「再」洗礼派と呼んだ。このように「再洗礼派」とは、成人洗礼支持者を批判したカトリックや福音派がつけた蔑称であった⁴。1529年4月22日にシュパイヤー帝国議会で決議された帝国最終決定と

翌日出された皇帝勅令は、再洗礼を行う者、再洗礼を受けた者を死罪にするよう帝国諸身分に命じている⁵。

このように再洗礼派は、帝国において死罪に値する「異端」や「反乱者」として扱われたが、その中でも一つの都市を支配し、自分達の君主と戦争を行ったミュンスター再洗礼派に対する見方は、より一層否定的なものであった⁶。彼らの特異な行動は、同時代の人々に恐怖を与えた。彼らは神を冒瀆する異端であり、悪魔の道具だと見なされた⁷。ルターもまた、ミュンスターの再洗礼派の行為を悪魔の業だと述べている⁸。世俗の統治者は、ミュンスターの反乱を、農民戦争やトーマス・ミュンツァー（Thomas Müntzer）と結びつけて恐れた。ミュンスター司教フランツ・フォン・ヴァルデックやヘッセン方伯フィリップは、ミュンスターの反乱が全ての良き秩序を破壊しようとしていると再洗礼派を非難した⁹。ヘルマン・フォン・ケルゼンブロークの年代記でも、ミュンスター再洗礼派は異端であり、彼らの行為は反乱や狂乱として描かれた¹⁰。彼の年代記は、1771年にドイツ語訳され、1881年と1929年に再版され、その後のミュンスター再洗礼派像の基盤となった¹¹。16世紀に形作られた極めて否定的なミュンスター再洗礼派像は、20世紀に至るまで歴史学の中にも、大衆的なイメージの中にも残り続けていた¹²。

しかし、このように常軌を逸した事件だと見なされてきたミュンスター再洗礼派運動は、元々は他の都市と大きな違いはない宗教改革運動として始まった。本書では、ミュンスターの宗教改革のはじまりから再洗礼派支配に至る過程を検討するが、その際ミュンスターの宗教改革運動を特異な例外現象だと見なさず、宗教改革全体の中に位置づけようと試みる。その際、「時代区分」と「統一性と多様性」という二つの側面に注目する。

3 時代区分

ミュンスターの宗教改革運動は、1530年代前半に活発化した。以下で

は、近年の宗教改革研究に見られる時代区分の仕方を考慮に入れながら、宗教改革にとって1530年代前半とはどのような時期だったかを概観する。

3.1 中世後期と近世の連続性¹³

19世紀以来ドイツの歴史研究では、宗教改革は中世から近代を隔てる画期となる出来事だと評価されてきた。プロテスタントの歴史学者レオポルト・フォン・ランケは、ルターによって始まった宗教改革を国家や社会が近代へと発展する過程の始まりであり、ドイツのみならずヨーロッパや世界の歴史にとっても変革となった出来事だと見なした。このようなプロテスタント的宗教改革観はドイツで第二次大戦後まで引き継がれた¹⁴。フリードリヒ・エンゲルスらによるマルクス主義的な歴史観では、ドイツで起こった宗教改革は最初の市民革命だと意味づけられ、東ドイツの研究者もこの考えを受け継いだ¹⁵。社会学者マックス・ヴェーバーは、ルターの天職観やカルヴァンの予定説が間接的に資本主義の発展を促したと評価した¹⁶。このように立場や評価は違えども、宗教改革を歴史上の大変革だと評価することはドイツの研究者に共通していた。

しかし、近年では、宗教改革を歴史上の大きな分岐となる事件だと見なす時代区分は、相対化されるようになってきている。というのは、中世後期から近世初期の時期がかなりの程度連続していると理解されるようになってきたためである。宗教改革の成功は中世後期の遺産に多くを負っており、宗教改革期に見られた様々な傾向の多くは、既に中世後期に現れていたことが様々な研究によって明らかにされた。ベルント・メラーは、都市の宗教改革の特徴である、教会に関する権限を既存の教会から都市の市参事会や市民の手に移そうとする、あるいは聖職者の特権を剥奪し、都市共同体に組み入れようとする傾向は既に中世後期に現れていたことを指摘した¹⁷。ハンス・ユルゲン・ゲルツは、聖職者への攻撃つまり反教権主義が中世後期に広がっており、宗教改革が広がる基盤となっていたと見なした¹⁸。ベルント・ハムによれば、中世後期に、キリストの受難と慈悲による悔い改めを強調する敬虔神学、「恵み」や「信仰」

など様々な言葉に「のみ (sola)」をつけて表現する傾向、理性や道徳、聖書「のみ」を強調する人文主義的考え、近世国家の形成、世俗権力の教会領域への権限拡張などの動きが出てきていた。彼は、宗教改革など近世に行われた改革で見られた傾向は、これら中世後期の動きの中に既に現れていたと評価した¹⁹。ハムは、宗教と社会が、複数性と階層性によって特徴付けられる中世的システムを破壊し、一つの中心的規範へと向かうというこれらの動きを、「中心的規範への指向 Normative Zentrierung」という概念で表した。ただし、中世後期にはその過程は不完全にしか実行されず、宗教改革によって貫徹されるようになったと評価している。そのため、宗教改革は、中世後期の動きを引き継ぐだけでなく、大きな変革も引きおこしたとされた²⁰。このように中世後期からの連続性を強調する論が、必ずしも変革としての宗教改革という評価を否定しているわけではないが、以前のように宗教改革によって中世が近代に変わったという時代区分はもはや維持できなくなっている。

他方では、1980年代以降活発になった宗派化論の影響で、16世紀前半の宗教改革の初期段階よりも16世紀後半以降に起こった変化に注目が集まるようになった。「宗派化 (Konfessionalisierung)」とは、教会と国家が支配領域の宗派的統一性を確立しようと推進した運動ないし政策である²¹。シリンクによれば、それは近世国家や規律化された市民社会の形成と結びついて、ヨーロッパの人々の生活を公私にわたり変えていった近世社会の根本過程であった²²。宗派化が進行したのは16世紀後半から17世紀初めにかけての時期なので²³、宗教改革史で宗派化論の影響力が強くなるにつれて、16世紀前半の宗教改革の時代が変革の時代だという伝統的な見方は力を失っていくことになった。

以上のように15世紀と16世紀の境界、また1517年以降の初期宗教改革の時期が歴史上の大きな変革の時期だという従来の見方はかなりの程度相対化され、それに伴い従来中世や近世と呼ばれてきた時代をどのように区分するが不明確になっている²⁴。しかし、いずれにせよ宗教改革を、中世後期から17世紀に至る長期的な変化の一段階として理解すると

いう傾向は強まってきている²⁵。本書で扱う1525年から1534年のミュンスターの騒擾・宗教改革を宗教改革全体の中で位置づける場合には、このような中世後期からの連続と宗派化の前段階という観点を外すことはできない。

3.2 宗教改革運動における1525-34年

それでは、本書が扱う1525～34年、特にミュンスター宗教改革が行われた1530～34年という時期は、宗教改革が進展する過程の中でどのように位置づけられるであろうか。そのために先ず、宗教改革内部での重要な時期の区分について概観する。

1525年を宗教改革において重要な変化が起こった年だと見なしたのはペーター・ブリックレであった。彼の考えでは、都市や農村の「平民」による「共同体宗教改革(Gemeindereformation)」が、1525年に「平民の革命」が敗北して以降、領邦君主による「諸侯宗教改革(Fürstenreformation)」に取って代わられたためである²⁶。

それに対し1529年を初期宗教改革が終わる重要な年だと見なしたのが、ゲルツである。1529年は、帝国諸身分がカトリックと福音派に分裂したことを明確化したシュパイヤー帝国議会、ルター派とツヴィングリ派が分裂し別々に宗派形成することになったマールブルク会談が開かれ、諸侯が教会政策に乗り出し、政治の影響力が強まってきた年であった。そのためゲルツは、この年に流動的で多様な運動によって特徴づけられる初期宗教改革が終わったと見なした²⁷。

このように1520年代後半から宗派化が本格化する16世紀後半の間は、南ドイツでは平民による下からの宗教改革が下火になり、帝国全体ではルター派が宗派として確立されていき、カトリックとルター派諸侯の宗派対立が激しくなった時期であった。1530年にはその後のルター派の信仰の基礎となった『アウクスブルク信仰告白』が起草され、1531年にはルター派諸侯と都市がシュマルカルデン同盟を結成するなど、1529年の抗議の後にルター派の教義や組織が整備され、宗派形成が本格化して

いった。1541年のレーゲンスブルク帝国議会で教義面での和解が目指されるなど、その後も宗派对立を解決しようという試みはあったが、結局1546年に始まったシュマルカルデン戦争で帝国のカトリックとルター派が武力衝突することになった。そして、1555年のアウクスブルクの宗教平和によって、帝国ではカトリックとルター派の両宗派が併存することが制度的に認められた。これ以降、帝国の各領邦ではカトリック、ルター派領邦にかかわらず宗派化が進んでいった。

ブリックレは1525年に共同体宗教改革は終わったと見なしていたが、実際にはこれは南ドイツに限定された話であり、北ドイツの諸都市ではこの後ようやく民衆に主導された宗教改革運動が始まった。1520年代初めから宗教改革が盛んになった南ドイツの諸都市とは違い、北ドイツの諸都市で宗教改革が始まるのは20年代後半以降であった²⁸。ミュンスターが位置するヴェストファーレン地方の諸都市で宗教改革が本格化するのには1529年以降である²⁹。

ドイツ南部で農民戦争が広がっていた1525年にミュンスターで起こった騒擾は、ほとんど宗教改革的な性格を持っていなかった。北ドイツ諸都市で宗教改革が広がっていった1530年に、ようやくミュンスターでも宗教改革が始まっている。このように1530年代前半のミュンスターの宗教改革は、帝国で宗教改革に対する諸侯の影響力が強くなり、宗教改革の様々な動きがルター派に一本化されていく一方、北ドイツ諸都市で民衆的な宗教改革が広がっていくという時代状況の中で起こった。

4 宗教改革の統一性と多様性

長らく、ルター派やツヴィングリ派、カルヴァン派など、世俗権力と結びつき体制化された諸宗派が宗教改革の正統派であると考えられてきた。それに対し、カールシュタット、ミュンツァー、再洗礼派、心霊主義者、反三位一体論者等の少数派は、「熱狂主義者」と呼ばれていた³⁰。近代的な歴史学研究が始まってからも、1960年代まで彼らは「宗教改革の

左翼」「宗教改革急進派」と呼ばれ、国家と教会を分離し既存の権力と結びつかなかったとしてルター派や改革派といった多数派から区別されてきた³¹。

しかし、近年はルターやツヴィングリ、カルヴァンといった神学者、さらにはルター派や改革派など体制と結びついた宗派を正統派として特権化する見方はかなりの程度相対化されている。これは、1980年代以降宗教改革の多様性を強調する見方が強まっているためである。ゲルツは1987年に、宗教改革は一つではなく、相互に異なった多様な運動を含む社会運動であったと述べた。そのため彼は宗教改革を単数形ではなく、「宗教改革諸運動 (Reformatorische Bewegungen)」と複数形で呼んだ³²。さらに彼は、再洗礼派等の「宗教改革急進派」だけでなく、ルターやツヴィングリ、カルヴァンを含む全ての初期宗教改革はどれも急進的だったと見なし、急進性を基準にして両者を区別するという旧来の分類法を批判した³³。1995年にはメラー、ヴェンデブル、ハムの3人が、宗教改革が一つの統一的な運動か多様性を内包していた運動かをめぐり議論を行った³⁴。スクリプナーとディクソンも、宗教改革の多様性を認めている³⁵。近年英語圏で出された宗教改革に関する著作でも、しばしば宗教改革は「諸宗教改革 (Reformations)」と複数形で表現され、ルター派や改革派、再洗礼派といったプロテスタント諸派だけでなく、カトリックの教会改革も、宗教改革として並列して扱われている³⁶。

もちろん、全ての宗教改革研究者が、宗教改革の多様性を強調しているわけではなく、その統一性を強調する研究者もいる。その代表は、1525年頃まではルターの教えが宗教改革のメッセージに共通していたと考えるメラー、宗教改革を複数形で呼ぶことを批判し、この時期の多様な改革の試みは全てキリスト教化を目指していたことを強調するスコット・ヘンドリックである³⁷。また、多様性を強調する研究者も、必ずしも様々な宗教改革運動に共通性がなかったと述べているわけではない。多様性を認めているハムやゲルツも、それぞれ中心的規範への指向や反教権主義的傾向は宗教改革に共通した性質だったと見なしている³⁸。

しかし、宗教改革を複数形で呼ぶかどうか、中心的性格を強調するかどうかにかかわらず、宗教改革は多様性を内包していた運動だという見方は宗教改革研究で既に定着している。このような宗教改革観の変化により、近年の研究では、再洗礼派を正統な宗教改革から逸脱した存在だとする見方も弱まってきている。

同様の傾向は、再洗礼派研究にも現れている。ハロルド・S・ベンダーに代表されるアメリカのメノー派研究者達は、20世紀半ばにチューリヒのツヴィングリ周辺のグループが再洗礼派の起源で、スイスから再洗礼主義が広まったという単一起源説を唱えた。そして、無抵抗・分離主義を取るスイス兄弟団やフッター派、メノー派が真の再洗礼派であり、暴力的なミュンツァー、農民戦争、ミュンスター再洗礼派とは区別されると考えた³⁹。しかし、このようなベンダー的な見方は1970年代以降、再洗礼派の起源はスイスだけでなく、スイス、南ドイツ、低地地方の三つあったという複数起源説を主張する研究や⁴⁰、初期のスイス再洗礼派では無抵抗・分離主義は必ずしも主流ではなかったことを示す研究の登場により⁴¹、維持できなくなっていく。こうして再洗礼派は起源も性質も多様であるという見方が広まると、ミュンスター再洗礼派もまた多様な再洗礼派の一派だと見なされるようになった。

ミュンスター再洗礼派研究の動向も、このような宗教改革や再洗礼派研究の傾向に合致している。ミュンスター再洗礼派研究では、キルヒホフを代表とする様々な研究者が行った実証研究により、1960年代以降従来の否定的なミュンスター再洗礼派像は修正されてきた⁴²。それに伴い、ミュンスター再洗礼派運動は、都市宗教改革運動の枠組みの中で理解されるようになっていく⁴³。

本書でも、初期宗教改革を多様な動きを内包した運動として理解する。そして、ミュンスター再洗礼派運動もまた、単なる特異な例外現象ではなく、初期宗教改革における多様な試みの中のひとつであると見なす。何故なら、ミュンスター再洗礼派運動は確かに、強い終末期待に突き動かされ、財産共有制や一夫多妻制を導入した、ヨーロッパ史上でも稀に見

る極めて特異な運動であったが、当初は一般的な都市宗教改革運動として始まったからである。

一般的な宗教改革運動から特異な運動へと変化していった過程や条件とはいったいどのようなものだったかを明らかにするために、本書ではミュンスターにおいて宗教改革運動が始まり、再洗礼派統治に至るまでの過程を検証する。

【注】

- 1 Karl-Heinz Kirchhoff, Die "Wiedertäufer-Käfige" in Münster, Münster 1996.
- 2 再洗礼派に関する概説は以下を参照。John D. Roth and James M. Stayer (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism, 1521-1700*, Leiden/Boston, 2007; C. Arnold Snyder, *Anabaptist History and Theologie: An Introduction*, Kitchener, 1995; Hans-Jürgen Goertz, *Die Täufer. Geschichte und Deutung*, 2. Aufl., München 1988; Ders., *Religiöse Bewegungen in der Frühen Neuzeit*, München 1993; S. Zijlstra, *Om de ware gemeente en de oude gronden. Geschiedenis van de dopersen in de Nederlanden 1531-1675*, Leeuwarden, 2000; 永本哲也、猪刈由紀、早川朝子、山本大丙編『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』新教出版社、2017年；踊共二『宗教改革急進派－その起源と宗派化の諸相』森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館、2009年、41-54頁；出村彰『再洗礼派 宗教改革時代のラディカリストたち』日本基督教団出版局、1970年；倉塚平『異端と殉教』筑摩書房、1972年；榊原巖『アナバプティスト派古典時代の歴史的研究』平凡社、1972年 他。再洗礼派の著作の邦訳には以下の二冊がある。倉塚平、田中真造他編訳『宗教改革急進派 ラディカル・リフォーメーションの思想と行動』ヨルダン社、1972年；出村彰、森田安一、倉塚平、矢口以文訳『宗教改革著作集 第8巻再洗礼派』教文館、1992年。
- 3 今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』日本基督教団出版局、2006年、253-261頁。
- 4 このような否定的な含意を避けるために、ドイツ語圏の学術研究では信仰洗礼の支持者を、「Wiedertäufer 再洗礼派」ではなく「Täufer 洗礼派」と呼ぶようになってきている。しかし、英語では「Baptist バプテスト」という表現は17世紀イングランドで生まれた宗派を指す用語として使われていたため、現在も「Anabaptist 再洗礼派」という表現が使われ続けている。James M. Stayer, Introduction, in: *A Companion to Anabaptism and Spiritualism*, p. xvii.
- 5 Gustav Bossert (Hg.), *Quellen zur Geschichte der Wiedertäufer. 1. Band Herzogtum Württemberg*, Leipzig 1930, Nachdruck New York/London 1971, S. 2-5; Goertz, *Die Täufer*, S. 121-128; Eike Wolgast, *Stellung der Obrigkeit zum Täuferium und Obrigkeitsverständnis der Täufer in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts*, in: Hans-Jürgen Goertz und James M. Stayer (Hg.),

- Radikalität und Dissent im 16. Jahrhundert, Berlin 2002, S. 95-98.
- 6 ミュンスター再洗礼派に対する否定的な見方の概観は、以下を参照。Ralf Klötzer, Missachtete Vorfahren. Über die Last alter Geschichtsbilder und Ansätze neuer Wahrnehmung der Täuferherrschaft in Münster, in: Barbara Rommé (Hg.), Das Königreich der Täufer in Münster - Neue Perspektiven, Münster 2003, S. 41-63.
- 7 Sigrun Haude, In the Shadow of „Savage Wolves“: Anabaptist Münster and the German Reformation During the 1530s, Boston/Leiden/Cologne, 2000, pp. 22f.
- 8 Martin Luther, Vorrede zur „Neuen Zeitung von Münster“, in: Adolf Laube (Hg.), Flugschriften vom Bauernkrieg zum Täuferreich (1526-1535), Band 2, Berlin 1992, S. 1443-1451.
- 9 Haude, pp. 23-32.
- 10 Heinrich Detmer (Hg.), Hermanni a Kerssenbroch. Anabaptistici furoris Monasterium inclitam Westphaliae metropolim evertentis historia narratio, Erste Hälfte. Die Geschichtsquellen des Bistums Münster, 5. Band, Münster 1900. (以下「MGQ5」) Heinrich Detmer (Hg.), Hermanni a Kerssenbroch. Anabaptistici furoris Monasterium inclitam Westphaliae metropolim evertentis historia narratio, Zweite Hälfte. Die Geschichtsquellen des Bistums Münster, 6. Band, Münster 1899. (以下「MGQ6」)
- 11 Klötzer, Missachtete Vorfahren, S. 46.
- 12 Klötzer, Missachtete Vorfahren, S. 51.
- 13 本節の記述は、以下の文献の記述に多くを依拠している。Stefan Ehrenpreis und Ute Lotz-Heumann, Reformation und konfessionelles Zeitalter, Darmstadt 2002, S. 1-29.
- 14 Ehrenpreis u. a., S. 3, 18; Olaf Mörke, Die Reformation. Voraussetzungen und Durchsetzung, München 2005, S. 71; Leopold von Ranke, Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation, Berlin 1839-47.
- 15 フリードリヒ・エンゲルス著、藤原浩、長坂聰訳「ドイツ農民戦争」山川均他訳「マルクス・エンゲルス選集第10巻フランスの内乱・ドイツ農民戦争」新潮社、1956年、3-98頁；田中真造「初期市民革命としての宗教改革とドイツ農民戦争」『思想』591、1973年9月、149-162頁。
- 16 Ehrenpreis u. a., S. 1-9, 18ff.; マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫改訳第一刷、1989年。
- 17 Bernd Moeller, Reichsstadt und Reformation, Bearbeitete Neuausgabe, Berlin 1987, S. 10-18, 72-78; バルト・メラウ著、森田安一、棟居洋、石引政志訳『帝国都市と宗教改革』教文館、1990年、16-34, 155-163頁。
- 18 Hans-Jürgen Goertz, Antiklerikalismus und Reformation, Göttingen 1995, S. 12-18.
- 19 Berndt Hamm, Von der spätmittelalterlichen reformatio zur Reformation: der Prozeß normativer Zentrierung von Religion und Gesellschaft in Deutschland, in: Archiv für Reformationsgeschichte 84, 1993, S. 7-82.
- 20 Berndt Hamm, Wie innovativ war die Reformation?, in: Zeitschrift für historische Forschung 27,

- 2000, S. 481-497; Ders, Normative Zentrierung im 15. und 16. Jahrhundert. Beobachtungen zu Religiosität, Theologie und Ikonologie, in: Zeitschrift für historische Forschung 26, 1999, S.200ff.; 原田晶子「中世後期への拡大—中世と連続する大変革（広がる宗教改革1）」『UP』539、2017年9月号、12-18頁。
- 21 踊共二「宗派化論—ヨーロッパ近世史のキーコンセプト—」『武蔵大学人文学会雑誌』第42巻第3・4号、2011年、267頁。
- 22 Heinz Schilling, Die Konfessionalisierung im Reich. Religiöser und gesellschaftlicher Wandel in Deutschland zwischen 1555 und 1620, in: Luise Schorn-Schütte und Olaf Mörke (Hg.), Ausgewählte Abhandlungen zur europäischen Reformations- und Konfessionsgeschichte von Heinz Schilling, Berlin 2002, S. 508.
- 23 Schilling, Die Konfessionalisierung, S. 514-528; 踊共二「宗派化論」265-266頁。
- 24 この時代の時代区分をめぐる議論については、以下を参照。Berndt Hamm, Farewell to Epochs in Reformation History: A Plea, in: Reformation and Renaissance Review, 16- 3, 2014, pp. 211-245.
- 25 宗派化の時代を超えて、さらに長いスパンで宗教改革を捉えようという見方も存在する。Peter G. Wallace, The Long European Reformation, Second Edition, Basingstoke, 2012; 西川杉子「長期の宗教改革運動—17・18世紀の展開」森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』91-106頁。
- 26 Peter Blickle, Gemeindereformation. Die Menschen des 16. Jahrhunderts auf dem Weg zum Heil, München 1987, S. 14; Ehrenpreis u. a., S. 28.
- 27 Hans-Jürgen Goertz, Pfaffenhaß und große Geschrei. Die reformatorischen Bewegungen in Deutschland 1517-1529, München 1987, S. 29ff.
- 28 北ドイツの宗教改革については以下を参照。倉塚平「ミュンスター千年王国前史(3)」『政経論叢』明治大学政治経済研究所紀要47巻5/6号、1979年、39-54頁（以下「倉塚3」）；棟居洋『ICU比較文化叢書1 ドイツ都市宗教改革の比較史的考察—リューベックとハンブルクを中心として—』国際基督教大学比較文化研究会、1992年；Heinz Schilling, Die politische Elite nordwestdeutscher Städte in den religiösen Auseinandersetzungen des 16. Jahrhunderts, in: Wolfgang J. Mommsen (Hg.), Stadtbürgertum und Adel in der Reformation. Studien zur Sozialgeschichte der Reformation in England und Deutschland, Stuttgart 1979, S. 235-308; Olaf Mörke, Rat und Bürger in der Reformation. Soziale Gruppen und kirchlicher Wandel in den weltlichen Hansestädten Lüneburg, Braunschweig und Göttingen, Hildesheim 1983.
- 29 ヴェストファーレンの宗教改革運動については以下を参照。倉塚3、43-54頁；Alois Schröer, Die Reformation in Westfalen. Der Glaubenskampf einer Landschaft, 1. Bd., Münster 1979; Ders., Die Reformation in Westfalen. Der Glaubenskampf einer Landschaft, 2. Bd., Münster 1983. 本書執筆終了後に以下の著作が出版されたが、十分参照できなかった。Werner Freitag, Die Reformation in Westfalen. Regionale Vielfalt, Bekenntniskonflikt und Koexistenz, Münster 2016.

- 30 「熱狂主義者 Schwärmer」という用語はルターが使ったものである。その後の教会史研究でも使われ続けたが、現在の歴史研究ではほとんど用いられない。Goertz, *Religiöse Bewegungen* S. 59f.
- 31 宗教改革から生まれた少数派を表す概念や類型の試みについては、以下を参照。倉塚平「序説 ラディカル・リフォーメーション研究史」倉塚平他編訳『宗教改革急進派』26-61頁；出村彰『再洗礼派』167-191頁；出村彰「解説」出村彰他訳『宗教改革著作集 第8巻再洗礼派』493-510頁。「宗教改革の左翼 The Left Wing of the Reformation」は、ローランド・H・ベイントンが、1941年の論文で提唱した概念である。Roland H. Bainton, *The Left Wing of the Reformation*, in: *The Journal of Religion* 21, 1941, pp. 124-134; Heinold Fast (Hg.), *Der linke Flügel der Reformation. Glaubenszeugnisse der Täufer, Spiritualisten, Schwärmer und Antitrinitarier*, Bremen 1962。「急進的宗教改革 Radical Reformation」の提唱者は、ジョージ・H・ウィリアムスである。George Huntston Williams, *The Radical Reformation*, Philadelphia, 1962.
- 32 Goertz, Pfaffenhaß, S. 245. Vgl. Hans-Jürgen Goertz, Eine „bewegte“ Epoche. Zur Heterogenität reformatorischer Bewegungen (Erweiterte Fassung), in: Gunter Vogler(Hg), *Wegscheiden der Reformation. Alternatives Denken vom 16. bis zum 18. Jahrhundert*, Weimar 1994, S. 23-56.
- 33 Hans-Jürgen Goertz, Die Radikalität reformatorischer Bewegungen. Plädoyer für ein kulturgeschichtliches Konzept, in: Hans-Jürgen Goertz und James M. Stayer (Hg.), *Radikalität und Dissent im 16. Jahrhundert*, Berlin 2002, S. 29-41.
- 34 Berndt Hamm, Bernd Moeller und Dorothea Wendebourg, *Reformationstheorien. Ein kirchenhistorischer Disput über Einheit und Vielfalt der Reformation*, Göttingen 1995.
- 35 R. W. スクリブナー、C. スコット・ディクソン著、森田安一訳『ドイツ宗教改革（ヨーロッパ史入門）』岩波書店、2009年、59-70, 84-85頁。
- 36 Thomas A. Brady Jr., *German Histories in the Age of Reformations, 1400-1650*, New York, 2009; Carter Lindberg, *The European Reformations*, 2nd ed., Malden, 2010; Carlos M. N. Eire, *Reformations. The Early Modern World, 1450-1650*, New Haven, 2016。ドイツ語圏でも、ラウスターが、カトリックを含む様々な宗教改革を「Die Reformationen」と複数形で表現している。Jörg Lauster, *Die Verzauberung der Welt. Eine Kulturgeschichte des Christentums*, 3. Auflage, München 2015, S. 295-333。近年の宗教改革研究におけるカトリックの位置づけについては、以下を参照。Wieste de Boer, *An Uneasy Reunion. The Catholic World in Reformation Studies*, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 100, 2009, S. 366-387.
- 37 Bernd Moeller, Was wurde in der Frühzeit der Reformation in den deutschen Städten gepredigt?, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 75, 1984, S. 176-193; ders., Die Rezeption Luthers in der frühen Reformation, in: Hamm u. a., *Reformationsgeschichte*, S. 9-29; Scott H. Hendrix, *Recultivating the Vineyard. The Reformation Agendas of Christianization*, Louisville/London, 2004.
- 38 Berndt Hamm, *Einheit und Vielfalt der Reformation – oder: was die Reformation zur Reformation machte*, in: Hamm u. a., *Reformationstheorien*, S. 57-127; Goertz, *Antiklerikalismus*, S. 18f., 117f.

- 39 Harold S. Bender, *The Anabaptist Vision*, in: *Church History* 13, 1944, pp. 3-24; 倉塚平「序説ラディカル・リフォーメーション研究史」33-36頁
- 40 複数起源説を唱えた記念碑的論文。J. M. Stayer, W. O. Packull and K. Deppermann, *From Monogenesis to Polygenesis: The Historical Discussion of the Anabaptist Origins*, in: *The Mennonite Quarterly Review* 49, 1975, pp. 83-121. ただし、再洗礼派の多様性については、その後修正の動きがある。スナイダーは、複数起源を認めながら、再洗礼派神学に共通性があったことを示そうとした。シュテイヤーも後に自らの複数起源説は違いを強調しすぎたと考え直し、スイスと南ドイツ再洗礼派の密接な関係を強調するようになった。彼は、上のスナイダーの試みも高く評価している。Arnold Snyder, *Beyond Polygenesis: Recovering the Unity and Diversity of Anabaptist Theology*, in: H. Wayne Pipkin (ed.), *Anabaptist Theology*, Elkhart, 1994, pp. 1-33; James M. Stayer, *Swiss-South German Anabaptism, 1526-1540*, in: John D. Roth and James M. Stayer (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism, 1521-1700*, Leiden / Boston, 2007, p. 105; Ders., *Whither Anabaptist Studies?*, in: Anselm Schubelt, Astrid von Schlachta und Michael Driedger (Hg.), *Grenzen des Täuferturns / Boundaries of Anabaptism. Neue Forschungen. Beiträge der Konferenz in Göttingen vom 23.-27. 08. 2006*, Heidelberg 2009, S. 395-398. シューベルトは、21世紀に入ってから「新宗派主義 Neukonfessionalismus」的な研究が出てきていると指摘している。彼によれば、ストゥルーベント (Andrea Strübind) やビーゼッカー-マスト (Gerald Biesecker-Mast) らは、神学や教会に対する貢献を重視する立場から、複数起源説などのベンダー的な見方を批判する研究を社会的な「修正主義的再洗礼派研究 revisionistischen Täuferforschung」だと批判している。Anselm Schubelt, *Täuferforschung zwischen Neukonfessionalismus und Kulturgeschichte*, in: Schubelt u. a. (Hg.), *Grenzen des Täuferturns*, S. 399-405.
- 41 代表的な研究は、J. M. Stayer, *Anabaptists and the Sword*, Lawrence, 1972. 初期のスイス再洗礼派については、Arnold Snyder, *Swiss Anabaptism: The Beginnings, 1523-1525*, in: Roth, et al. (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism*, pp. 45-81、研究史については、踊共二「再洗礼派運動と農民戦争」『史潮』新23号、1988年、89-101頁を参照。
- 42 キルヒホフの研究は、ミュンスター再洗礼派が当初は平和的であったことを明らかにし、本質的に暴力的だったというイメージを覆した。Karl-Heinz Kirchoff, *Gab es eine friedliche Täufergemeinde in Münster 1534?*, in: *Jahrbuch des Vereins für Westfälische Kirchengeschichte* 55/56, 1962/63, S. 7-21. さらにキルヒホフは、ミュンスター再洗礼派運動は貧民の反乱だと言う伝統的イメージも覆した。Karl-Heinz Kirchoff, *Die Täufer in Münster 1534/35. Untersuchungen zum Umfang und zur Sozialstruktur der Bewegung*, Münster 1973. (以下「KIR」)
- 43 ミュンスター再洗礼派に関する研究史の概要は、本書2.2を参照。